

# 母の故郷ふるさと ⑤

— 福永津義・人間ひととその仕事 —

高橋さやか

## (IV 承前)

五月から次第に自己の外へと心をひらき、活動を発展させた子どもは、七、八月（夏休みの時間も通って）に至って、外なる世界を自分の内なる能力と自分の方から結びつけ、自分のもの（能力範囲の内なるもの）として獲得するまでに成長した。

一年の歩みの第二期がはじまる。

「ふるさと（故郷）」九月の主題は、一人ひとりの人間の、（個体の）外界と内界との接点である。それはまた、生れる前なる過去と生後の現在との接点でもある。「遊び場所」において、外とかかわる自己を確立した子どもに、再び、自己内部への沈潜、自己確認を期待する津義の心意がここにみとめられる。夏休みに里帰りをした家庭もあろう、祖父母や父母の生地（実家・本家）の人々との親しい交流を経験した子どもも多くいるだろ

う、祭など郷土的な年中行事も夏には多い。昔話や民話などに親しむ機会にも恵まれるであろう、……九月、園生活に戻って、夏休み中の報告——おみやげ話が弾むうちに、なりゆきとしてもスムーズに、「ふるさと」は子どもの意識の中に定着することが期待できる。自分自身の出自に親しむことは、それだけ、主体意識を充実させる。

十月、体育の季節でもあるが、充実度を高めた一人ひとりの子どもが、自分のことについて自分で気をつけ、処理できるようになる、——一人ひとりが「わたしのからだ」を考え、大切にし、自分のことは自分で責任をもつことができるように、津義は期待する。

このように一人ひとり独立の能力を獲得してはじめて、自信を以て自分が自分であることにおいて協調協力が可能になる。

自他間でよいかかわりあいを成立させ得るとき、ひとは感謝の心をもつ。感謝の心が具体的な行動——活動に実現するとき、そこに奉仕活動が生れる。奉仕活動は感

謝の具体的表出にはかならない。

十一月の主題「橋」は、距りを結ぶものの象徴的な実在である。感謝の発動としての奉仕が、生活における人間同士のかかわりあいのよりよいあり方に向ってなされるとき、その奉仕活動は、とりもなおさず「橋」の役割を果たすことになるであろう。距りを結び繋ぎとめ、かかわりあいを育てかつ守護するもの、それが橋の役割である。

人間の中に生れた最高の、また最も純粹な奉仕者、神から人間に架けられた橋、それこそキリスト——イエスである。その誕生をよろこび祝うクリスマスは、人間の側からの感謝の出発点であり、そして到達点でもある。

十二月は「クリスマス」の月である。クリスマスを迎えて、子どもは、今や自分に働きかける神の愛を見定める。四月、母を、身近な具体的な保護者保育者を通して受身な形で愛を識った子どもは、クリスマスを迎えて直接に、愛である神へ、自分の方から思いを致すところまで歩んだ。

第二期「感謝(奉仕)」の主題がこうして達成される。

子どもの友、貧しい者病む者悩む者の友、そのイエスを識り、イエスに従って、イエスによるこぼれることを自分のよるこびとして奉仕活動の実践にいそんだ子どもは、自分の働きが、他のよるこびを生み出すことを経験する。サンタクロースはほんとにいたし、いまでもいる。人に知られないように奉仕活動を実践——イエスに従う実践をする者がサンタクロースであり、イエスの分身(になり得た者)である。

他者によるこびをもたらし、他者のよるこびを生み出す経験をするとき、子どもは、活動し働くことの価値を実感する。それは、疑問の余地のない自己の存在意識の確認につながり、最早動かされることのない自信——自己充実による満足となって自分自身に帰ってくる。

第三期の主題「希望」は、この確かな自信に支えられて出発する。

新年は、「時」を意識する節目ふしめにも当たっている。自信を確立した主体者の活動は、時間と空間の中で展開され

る。

一月の主題が「時」であり、二月の主題が「わたしたちの国・世界・地球」(今日では「宇宙」まで広げるべきであろう)であるのは、主体的生活者・子ども、が対応すべき時間と空間を指向するものである。

三月「よい子ども」——一人ひとり、その年齢の子ともとしての人格の達成、を以て一年が終る。

自己の発見——対人関係の発見——対自然関係の発見——生活の場の獲得——内省(再度の自己指向)——主体的独立の確認——かかわりあいの理解とよいかかわりへの指向——役割活動・共同意識による活動——自己充実の達成——時間への対応——空間の認識——至った段階における人格達成……やや今日風に言い換えれば、このようにもいえようか。津義によれば、三歳児は三歳から四歳へ向う段階として、四―五歳、五―六歳はその段階として、それぞれ年齢相応のあり方において年度の始め四月から、年度の終り三月にかけて、以上のべたような生活意識(意識的な確認における活動)を重ねるので

ある。

限られた時間とスペースの中ではつくしかな、舌足らずな表現に終るほかはないが、この観応の移行と、それが（ここにはふれ得なかったが）具体的な生活活動を以て充実現されるものであるところに、フレイベリアン福永津義の真面目は十分にあらわれている、と言い切つてよいと思う。四月のみならず、すべての月は主題聖句を伴っており、聖句は内容的に同義のものを、年級によって長さや用句を変えてあげている月もある。月主題はただムード的指向を示すものではなく、実際活動について、それも、遊戯・歌唱・談話・観察・工作（作業を含む）、の五項目（大正十一——一九二六——年勅令を以て制定された幼稚園令による五項目。ただし、歌唱は唱歌であり、工作は手技であるが、当時小学唱歌というようない方もあつて唱歌という歌曲教材をいうような感じになり、教材を重んじるのでなく歌うことそのこと——活動——を重んじる気もちから、歌唱、の語を用いた。手技、も、手先のみを使う技術訓練、のイメージを

嫌って、工作、の語を用いた。）にわたる活動の展開においてとりあげられる、というより、活動の展開が主題に応じて計画・設定されるものであった。主題聖句のあげ方もそうであるが、この五項目にそつた活動内容の設定にも、年齢（年級）に応じてのあり方は、明確にふまえられていた。アイデアリズムが色濃く出ているとはいへ、津義の「系統的保育案」は、子どもの実態に即応した生活的現実対処的な具体的実践プログラムとして構築されていた、と言うことができる。

主題に貫かれることにおいて甚だ独自に「系統的」であり、二年級（三歳―六歳）共通主題による活動の設定において今日でいうたて割一貫教育的である。五項目のとりあげ方においては相関型であり、実践形態からは生活経験型＋プロジェクト・メソッド型である。年齢の適応を重んじることでは発達指向型である。そのような園生活の計画理念としての「愛と信頼・感謝と希望の生活」であった。

## V 「母の歌・母と子の遊び」

フレーベルの「人間の教育」の、幼稚園生活における実践的集約が、「愛と信頼・感謝と希望の生活」であるとするれば、「母の遊戯及び育児歌」Ⅱ「母の歌と愛撫の歌」は、もともとが母のための生活活動指導書であるから、津義にとってそのものずばり、直接の全生活——母として保育者としての生活の規範であった。津義の生活は、子どもとの対応によって充足されている。

『来れ（いぎ）、我らをして子らに生かしめよ』Ⅱ『さあ、子らに生きようではないか』というフレーベルのよびかけに、津義は、全身全霊をあげて共鳴した。その共鳴はそのまま、「母の歌・母と子の遊び」そのものに現出された。

津義の精神は、フレーベルとともに、そして聖書・ルカによる福音書第一章四六節―五五節とともに、母の歌、神によって子を宿し、育てる者として選ばれた者の神への讃歌を歌う。

「フレーベルは男性なのに、どうしてこんなに母の心を歌い得たのだろう。歌わずにはいられないほどに母の心を自分に感じることができたのだろう」津義はしばしば、感にたえぬようにこのような意味のことばを語った。津義によれば、フレーベルの方が「母」に共鳴しているのであった。そして、津義自身、フレーベルと共に「母の歌」をうたい、「母と子の遊び」に専念した。自分がそうしたばかりでなく、これまたフレーベルにならって、知る限りの母たちに、「叡智ある母」として、「天職」の自覚に生きることを、語りかけ、問いかけ、共に「子らに生きる」ことをよびかけつづけた。それは唯一なる真理を頌ち合うこと、神がそのように具えられたはずの、母が母としてそうあるべき幸福、を頌ち合うことであった。

フレーベルは、幼稚園を単なる教育機関・教育施設として創始したのではなかった。むしろ、母を母たらしめるために、その母の育てのわざの場・家庭を家庭であらしめるために、家庭とタイアップする子どもの園そのとして

幼稚園を（家庭に對置させるように）設定したのである。幼稚園は子どもの教育の場であるよりも、母たちの教育の場であるべく考えられている。園は、子どもにとつては、活動の場、生活の場、成長の（生長するための条件を保障されている）場、である。

そして、幼稚園は、母にとっては子を識る生活の場、母であることの自覚を与えられ、支え援けられる場なのである。

津義は、フレーベルの幼稚園をそのように理解していた。（筆者などはこの稿を書くことによつてはじめて明確にこの事実をさとることができたようである。津義は、さきにも記したように実に、母の会活動に熱心であった。幼稚園にかかわっている間、必ず母の会を盛りたつて、その集会活動は、月例会（一応全員出席が原則の）はもちろん、より／＼の有志の研究會、おしごと會、もちより會、等様々の形で——母親たちは出易い集りに出ればよく、無理のない、気安い、十数人から三十人くらいがいつも集りをもっている、というような——いつも

活気あるものであった。そのような母親たちとのかわりあいには、今にして思えば、まさしく、幼稚園のあり方の、それが本流だと考えていたのに違いないと思われる。不肖の娘は、子どもとの活動は好きであったが、「母の会」は年久しく苦手であり、それを標榜して憚らなかつた。この点だけでも後継者失格である。）

自分自身を先頭者とする母親教育（の歩み）のテキスト、羅針盤、実践的課業解説書が「母の歌・母と子の遊び」である。

「母の遊戯及育兒歌」「母の歌と愛撫の歌」——前者は、A・L・ハウの訳書名であり、後者は茅野蕭々、莊司雅子両大家が採られた訳書名である。筆者などは、ただこれら先師に学ぶほかはないのであるが、福永津義のうけとめ方に即していえば、「母の歌・母と子の遊び」というのが適っているように思われる。

津義は、最初の著書（盾雄との共著）「幼児教育の実際」それにつづく「子供心」そして戦後の「愛母通信」、遺稿「母の書」……これらすべてに、くり返しくり返し

「母の歌・母と子の遊び」を叙述べつづけた。初めの二冊は、津義自身未だ若き母であった時代の「母と子の遊び」の実践報告であり、彼女自身の「母の歌」である。「愛母通信」は、やや間接的になるが、それでも随時随所に「母の歌・母と子の遊び」が顔を出す。書簡の形をとる随筆になっている。そして、(筆者がなお原稿のまま温存している)「母の書」は、最初で最後の『フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」』の津義流の、——彼女流に密着詳細を尽した解説……活水卒業以来五十有余年にわたる講義講話録の整理集大成、といえる書である。(「母の歌と愛撫の歌」は多く茅野訳によっている。荏苒訳は見ないまま逝ったので)いずれこの「母の書」だけでも、筆者自身世に在ることを許されている時間の内に上梓できるよう願っているが(できれば既刊書もあわせて著作集としたいと願っているが)ここではその冒頭のみを掲げることにした。

††

「母の歌と愛撫の歌」(二八四四年)は、彼の哲学的

教育学の基礎づけである「人間教育」公刊におくれること一八年、哲学的宗教的基礎に立っての彼の教育体験の果実を、母と子の実生活の中に収め得た、いわば彼の教育応答の歌ともいうべきものでしょう。

また、四六時中、子どもとは離れられない母親が、そのときどきの子どもの表情や仕草にひきこまれて、何の意識すらもなく、語りかけたり、世話したり、日常茶飯事のことども——母の本能的なもの——を、彼フレーベル自身の目と心とでとらえ、それを母の叡知にまで高めようとの、育児開眼の書ともいえましようか。

さらに、これは彼が期待した人間像——宗教と科学と芸術、神と大自然と人間、この三大協調・協和に生かされ、生きる、人間——が開発される場、その起点は家庭であり、その保育教育の担い手は女性、母、であると信じて、彼女たちへその協力を呼びかける切なる彼の親書であると考えられます。(中略)

この、「母の歌と愛撫の歌」は、母が子を守る——目守るときのうた、子どもを見守る母のおのずからなるひ

とりごと、見守りながらつい声に出してしまふ切ない母の愛情のかたかりかけ、つまり、母がうたう子守りうた、ともいえます。無論子守りうたといつてもいいわゆる「おねんね」のうたとは限りませんし、「おきて泣く子のつらにくさ」とうたう母ならぬ辛い思いの職業人（はたらきびと）の子守りうたと考えられてはなりません。

フレーベルはこのようなくありふれた、本能的な母と子の日常のやりとり、母のうたと母と子の遊びの中に、人間の生命と知恵の扉を開く合鍵を見出し、ここに彼の教育基本のかたちを発見したのです。

母の本能、母なるが故に自然に具えられている能力、或る時は医師よりも敏感に子の病気を発見し、ある時は巧みに悪より遠ざけ、あるときは見事に危険より子どもを守り通す直感、本能、子に対する本能的な母の心の応答の中に、フレーベルは、全知・全能・至愛の創造者神が、その創造計画の中に女性を「ふさわしき助け手」、生命を生み、生命を育てるわざのよき助手と定められたことを信じました。

十十

津義は、「母の書」のはしがきをこのようにはじめて  
いる。  
|| つづく ||

(西南女学院)

〔筆者紹介〕 一九二一年生れ。福岡の西南学院大学卒。現在、母校の兄弟校九州小倉の西南女学院短期大学教授。母の生涯を連載している本文には、祖父母の徳永規矩・うた、及び父親の福永盾雄、母親の福永（旧姓徳永）津義という、筆者の家系的背景が詳しい。

幼年時代の父の追憶を物語化した佳品『星空』を『子ども  
の館』（福音館、33号と35号）に発表している。主な著書は『子どものコトバと文学』（新読書社）、『言語文学教育と人格形成』（新読書社）、『保育』（博文社）、『現代の人間と教育』（新読書社）。

なお合唱指揮者福永陽一郎氏は、筆者の実弟にあたる。